



ばあ じい

ママをいきかう人たちのバラバラシンケン物語

2014.11 第3号

特集 認知症疾患治療病棟

近藤 通子 医師 小山 英宣 看護師 川上 尚子 精神保健福祉士 矢田部 信行 看護師

認知症ディケア考 北山通ソウクリニック 院長 宋 仁浩 医師

「認知症本人の言葉」と「10のアイメッセージ」

京都府立洛南病院 副院長 森 俊夫 医師

認知症の人とともに生きる社会 京都福祉サービス協会 藤本 敏朗 さん

父と過ごした大変だったけれど大切な時間

鈴木 祐三子 さん

障害者就労継続支援B型事業所 ゆりかもめ

「社会と関わりを持てる場を目指して」

医療法人 稲門会

いわくろ病院



今回の特集は認知症です。

配偶者や両親が「認知症では？」という思いを持ったとき、どこで診てもらえばいいのだろうかと思うと多くの方が悩まれることと思います。精神科の外来や入院でどのような治療をしているかということも、実はあまり知られてはいないのではないのでしょうか。そもそも、認知症って良くなるものなのだろうかという疑問もあることでしょう。

この特集ではそういったことをお話することで、困っておられる方やその家族が、症状に即した医療機関へとたどり着き、適切な治療を受けることが出来る。そして、介護者のケアのもとで、ご本人が穏やかに、ご家族や地域の中で生活出来るように、手助けとなればと考えております。

特集 認知症

認知症

近藤Dr 認知症と言えば、暴力、暴言、介護拒否、徘徊などの症状を想像される方も多いと思います。症状のひとつに徘徊があります。近所のお宅に侵入してしまったり、家を出て行ったがり帰ってこないなど、徘徊にはいろいろなパターンがあります。「夕飯を作りに戻らないといけない」と思い込んで家を出たり、「ここがどこなのか分からないので出口を探して歩き回るアルツハイマー型認知症などに伴う徘徊や、ただただ歩くだけという特殊な形の徘徊もあります。

行動を見守る

当院では多くの場合、認知症の症状が重くなつてから来院されるのですが、特別な場合をのぞいてまず薬を投与してこの状態をなく、その方がどんなパターンの症状を発症されているのかを見守るところから治療を始めます。例えば、認知症の方の徘徊は転倒の危険など、見ていてハラハラするものも多のですが、観察することが治療の第一歩なので、根気強く続けます。それには人手も掛かるのですが、観察することによって本人らしさを、どういった理由でどこに来られたのかということを知ることが治療への第一歩なので欠かすことは出来ません。



療養科長 認知症治療病棟担当医
近藤 通子 Michiko Kondo

自由に歩けるいわくら病院

当院の認知症病棟は広いので、皆は棟内を自由に歩くことが出来ます。歩いておられるうちに、疲れしてしまうこともあります。そんなときを見計らって「お疲れ様です。お茶でもどうですか」なんて話しかけるんです。すると、「ありがたういはいます。ちょっと欲しかったのでいただきます」とお話が生まれ、「ご本人と私たちの間に関係性が生まれます」とお話を伺ったことが何度か繰り返されるうちに、「ここはもしかしたら居てもいいのかな」という風に思われる方もいて、それがその方にとって安心できる場所と感じて頂けることになり、精神の安定にも繋がります。そうすることによって、お薬は使っていないけれど、落ち着いていられるという状態を作ることもなるのです。広い空間を好きにだけ歩けるので、こういったケアが行われています。

矢田部 多くの病院が、入院中の生活の場所とい

うとベッドとその近辺に限られますよね。そこに居ないといけない。でも、いわくら病院の場合は病棟の中を自由に歩ける。また、歩いていても咎められることがない。その辺りが、大きな違いなのかも知れませんね。

認知症の中核症状と周辺症状

近藤Dr 症状の中には、中核症状と周辺症状があります。中核症状は認知機能に関することであって、例えば物事を忘れてしまうという症状です。周辺症状というのは不安であるとか悲しいであるとか、逆に怒りっぽいであるとか興奮した状態であるとか、感情として表に現れる症状です。私たちはもちろん低下していく認知機能を良くしたいと思っておりますが、残念ながらそれは現代の医療では難しいことです。ではどうしたらいいかというと、認知機能の低下に伴って精神症状が少しずつ表れ、在宅や一般的な病院や施設での生活が難しくなってしまう方々を精神科で診て、少しでも精神症状を良くしていくということが私たちの仕事の一つのかなあと思っています。私たちの仕事の半分は中核症状を少しでも良くすること、また半分は精神症状を良くすることだと思っています。

受け入れられることが安心につながる

小山 病院の病室はどの部屋もよく似ています。認知症の方は自分の部屋と他人の部屋の区別がつかなくて、他人のベッドにお構いなしに入ってしまうこともあります。一般の病院ならこんなとき注意を受けることになるかも知れませんが、当院では特に注意することはありません。でも「なに、人の部屋



地域連携室室長 看護師 認知症ケア専門士
矢田部 信行 *Nobuyuki Yatabe*



精神保健福祉士 認知症ケア専門士 認知症治療病棟担当PSW
川上 尚子 *Naoko Kawakami*

に勝手に入ってきてんねん」と思われるその部屋の方がおられるわけで、そこを上手く問題にならないように私たちは対応をしています。認知症の方にとって何度も注意を受ける経験というのは「ここにいたらあかん」という感覚を与えてしまうことにつながります。まわりの人達に受け入れられること、「自分の居場所がここにはあるんだ」と安心し、落ち着いて頂けるのです。

相談そして病院へ

川上 私はソーシャルワーカーという立場にありません。認知症の方やご家族がいわゆる病院に相談に来られたときに、まず始めに対応する部署です。相談を受けた後は、まずは一度外来受診に来て頂いて精神科の入院治療や外来治療で出来る内容を説明すると共に、病棟の見学をして頂き、入院された場合はこういったところで喜らして頂きますというところをご説明させて頂きます。

説得と納得ということ

川上 精神科に関わっていますとよく使う「説得」と「納得」という言葉があります。例えばよくある、食事をしたのに「食べてない」と認知症の方が仰るケースですと「さっき食べましたよ。だからもうありません」と事実を説明するのが「説得」。でも「本人は全く覚えていなくて、事実を説明されたところで納得出来ないんですよ。だから、今から準備するから、もうちょっと待っていて下さいね」とか「何時になったらご飯にしますね」といった対応をすることで「そうか、ちゃんと用意してくれるんやな」と納得して頂く。そういった違いのことを指します。

感情の裏返し

矢田部 認知症の方が、ケアをしている方に対して攻撃性を向ける事があるという話を時々聞くのですが、なぜ他人より家族や身近な人に攻撃的な感情が表れるのでしょうか。

小山 これは感情の裏返しだと考えられると思うんです。一番熱心に介護されていた奥さんが、一番の攻撃対象にされてしまったりということはよくあることです。家族や身近な人が一番その方のことを心配していますので、例えばお金の管理なんかも嫌でも預かなければならないことも起こります。「ご本人が調子がいいときは「ああ、してくれるか、ありがとう」でいいですが、ちよつと心配になってきたりすると「あの通帳どこやったんや」「勝手に使われているんやないやろか」などと疑ってしまったりすることもあります。一番信用出来る方に全ての管理を任せざるを得ないんですけど、反面なにか上手くいかないことがあると、その人が何もかも悪いんやというよつな感情になってしまうんだと思います。

矢田部 なるほど。きっと、その人のことをいつも考えておられるんでしょうね。この人に頼りたいという気持ちが強すぎて、行き過ぎてしまつたということなんじゃないかな。



「退院に向かつて」

近藤 Dr 「ご家族が面会に来られたときに、「こんな対応をしたら嬉しいそうでした」というようなことを入院中からどんどんお伝えしています。「ご本人との接し方のヒントのようなものを少しずつ少しずつ伝えていって、いざ退院出来そうだなとなれば、ケアマネージャーさん、ご家族やときにはご本人も交えて会議をします。会議では看護から見てもこんなアプローチがいいとか、介護面で注意する点を確認したり、あとはその人に合ったどのような社会支援を使っていくかというふうなことをケースワーカーからお伝えするふうなこともあります。」

川上 「ご本人が会議に参加されるメリットは大きいですよ。「ご本人も「これだけの人が自分のために集まってくれて」と直接感じて頂けますし、支援していく側としてもご本人の口から直接に「ありがとうございます」とか「私はいざで生活したいと思っています」とか言ってくると「よしーがんばろう」という気持ちになれますしね。病院側が関係者に伝えるよりもずっと何倍も効果があると思います。」

認知症は改善するの？

小山 認知症カフェを例にとってお話をさせていただきます。認知症カフェは認知症の方々が役割を果たしながら活動する場でもあります。当院でも病棟内プログラムとして行っています。入院前に、地域の人や警察の世話になった。家族も散々迷惑をかけられた。もう絶対病院から出さないうれいと言われていた方がおられました。その方が、認知症カフェの活動を通してどんどん自分の役割をつかみ、

変わっていく姿を目の当たりにしました。最初は私も認知症カフェに半信半疑のところもあったんですけど、活動によってその人自身の力が引き出されて、もう一度社会で生きていく力を獲得していくことが出来る。それは医学的にどうかは分かりませんが、社会的には十分に治ったということがいえるのではないかと考えるようになりました。」

認知症になっても人生は終わりではない

近藤 Dr 自分自身や家族が、もしかして認知症かな？と感じたときに、初めから精神科の病院に行くというよりは、イメージとしてハードルが高く、なかなか難しいことだと思います。ですので、最初は総合病院であるとか、かかりつけの内科のお医者さんなど、ご本人が行きやすいお医者さんで相談されるのが良いのではないのでしょうか。最近、認知症関連の世界で言われているのは、認知症になっても怖くない社会を作りましょうということなんです。認知症になっても人生が終わってしまうわけではない



看護師 認知症治療病棟棟長 認知症ケア専門士
小山 英宣 Hidenori Koyama

くて、認知症と共に生きながらも前向きに生き生きとした毎日を送っている方もたくさんおられます。だからこそ、これからは認知症になっても人生まだまだ終わりじゃないんだよということ、日々の診療と共に私たちもどんどん発信していかなければいけないと感じています。」

矢田部 認知症自体は現代の医療では治せないのかもしれないけれど、早いうちに医療にたどり着くことが出来たなら、その後の人生は随分変わるはずだと、つまり、認知症になっても別に怖いことじゃないよという環境をつくろうということですね。私もそこは大事なかなと思いますね。」

近藤 Dr 今までの当院の認知症医療は認知症がかなり進行した段階に至ってからの出会いがほとんどでしたが、これからは少しでも早い段階でお会い出来るように、「こちらとしてもいざから病院という敷居の高さをどうにか下げる方法はないかしら」と模索しつつ、早い段階で関わらせてもらってその人らしい生活出来るようにしていきたいなと思いますね。でも、そこには凄く大きな社会的偏見という問題があります。しかし、その社会的偏見と闘ってきたというのはいわくから病院の歴史であるようなので、認知症の分野でもそういったことが出来ないかなと思っております。」

認知症デイケア考 〜作話+反動形成+妄想〜

北山通ソウクリニック 院長

宋仁浩



古典的精神医学の世界では、妄想について「否定せず」として肯定もせず「アンタツチャブル」として扱うとあります。ところが北海道の『入るの家』では、年一回公民館を借りて、一般公開で「幻覚妄想大会」なるものを催します。最も笑いを取ってウケた人に大賞さえ授けられるそうです。

頭の中に直接聴こえる不思議な声(幻聴)と、実際に目や耳といった感覚器を通して入る情報の矛盾に戸惑い、自分なりに懸命に考え整合性をつけたこと(妄想)を、頭ごなしに否定され一笑に付される時、彼等は頑となる。ところが、同じ苦悩、経験を持つ仲間と一緒に語り、暖かく笑いあう時、「やっぱり妄想だね、これ」と、病識と連帯をもたらず、自助グループにだけ在る力と言えるでしょう。

頑な妄想とは、一面、ステイグマ、断罪に対する反発+反動形成の産物では、ないでしょうか。認知症においては、これは一層明瞭となります。状況の失認、混乱、記憶の欠落を、彼等は作話で埋めます。これに対して周囲は、呆けてもどつては困るという思いから逐一順序立てて事実を返し、誤りを指摘、訂正してしまいます。懸命に自分のもの忘れを低く見積もって生きようとしている彼等が、訂正への反発から頑固に自説を主張、作話+否定される+反動形成から、一層頑なに作話に固執+妄想と見える、という経路があると私は思っています。

小澤勲は妄想の中にこそ、障害を抱え懸命に生きようとする認知症の姿がある、と語っています。アンタツチャブルではなく、そこに至る葛藤こそ「守り育むべき大切なもの」である、と。

従って、認知症の妄想は、むしろ事実のなかに接し、根掘り葉掘り具体的に聞きます。その際、訂正しないのは勿論、「なぜ？」と問うのは、禁句です。その瞬間、決して認めたくない処理できない自分の

WITH DEMENTIA



北山通ソウクリニック デイケアルーム

このデイケアで、特に気をつけて実践しているのは、「つまずきを減らして心の安定を図ること」。「つまずき」とは、患者さんが「できない」「わからない」という事態に直面して、不安、落ち込みを感じることを指します。そんな「つまずき」を減らし、心の安定を取り戻して初めて、「意欲・想い・笑顔を引き出す」ことができる。さらに、その結果として「言葉と笑顔が増え、心が元気になる」と考えて患者さんと向き合っています。

【〒606-0957 京都府京都市左京区松ヶ崎小島町 8-2 電話：075-706-8500】

内にある葛藤に直面してしまい、「ごちうに心を閉ざすと、N・フェイルは語っています。
「つやつと、妄想と接している」と、かつて「つたつた自分、今こう在りたい自分、その人の人生の苦勞、満たされなかったものが、見えてきます。
当院デイケアでは、しばしば「もの忘れ」そのものも話題にします。「安心して失敗できる場所」(康主任)の受け入れの中で、共に語り笑いあう中で、葛藤は、共感的に昇華されていきます。
畢竟(ひっきょう)、スタッフが船頭を勤める自助グループと、考えられています。

「認知症本人の言葉」と 「10のアイメッセージ」

京都府立洛南病院 副院長
認知症疾患医療センター(精神科医)

森 俊夫



最初に少し時間を溯ります。今から10年前の2004年。日本で初めて認知症本人が実名で登場した時です。福岡在住の越智俊二さん(当時57歳)でした。その日京都の国際会議場で開催された国際アルツハイマー病協会(AAD)の国際会議で、54歳で認知症の告知を受けた越智さんは「認知症本人からのメッセージ」として家族への思いを66の国や地域から集まった人々に届けました。当事者が語る時代、認知症新時代の幕開けでした。そこに長崎在住の太田正博さんが続きます。52歳の時にアルツハイマー病を発病した太田さんは、2005年から全国講演を開始します。タイトルは「認知症と明るく生きる」。認知症を生きていることが肯定的に語られた瞬間でした。

そこから10年、当事者の言葉は続きます。たとえば病名告知の場面。この時の心情を京都の中西栄子さん(当時63歳)は、「認知症の診断を受けて、夢も希望もなくなった。この先何をしていいのかわからなくて生きていくのか、わからなくて、つらかった。毎日やることになかった。認知症やし、何もしたらあかんと思うていた。塀の中に閉じ込められている感覚だった」と表現しています。

しかし中西さんはそこに留まりませんでした。医療やケアに加えて、家族の会や京都で新しく始まった認知症カフェでのサポートが中西さんとその家族に伴走します。そして現在の心境を中西さんは次のように語っています。「デイサービスに行ったり、家族の会に参加したりして、毎日やることができ、自分自身の中で認知症のイメージが変わった。認知症になっても、元気で楽しく生活していることを同じ病気の人に知らせたい。「がっかりしなくてよい」と。認知症になつたからと、力を落とすこともないし、途方に暮れることもない、ということがわかったのです。それを同じ境遇の人に知らせたい。」

そして2013年4月に国際アルツハイマー病協会が発表した「世界認知症宣言」。「私は認知症と

LIVE WELL

もに幸せに生きることが出来る」(I can live well with dementia)。認知症の当事者を主語にした凛とした姿勢と肯定的な響き、そして「認知症とともに幸せに生きる」という爽やかな解放感に満ちあふれたメッセージは、私たちの認知症に対するイメージを根底から変えていきます。そしてもう一つの驚きと感動は、太田正博さんの「認知症と明るく生きる」との呼応です。世界認知症宣言に8年先行していました。

「認知症本人の言葉」に耳を澄まし、京都では昨年9月に「京都式オレンジプラン」(5ヵ年計画)が策定されました。その中心に位置するのが、認知症の「私」を主語にした「10のアイメッセージ」です。認知症当事者の声を政策評価の指標としたことで、京都の認知症施策は欧米の認知症国家戦略と同質の水準を持つに至りました。

「10のアイメッセージ」が叶えられた2018年3月の京都、それが私たちが「たどりつきたい地平」であり、私たちのミッションです。



京都府立洛南病院 待ち合い

「忘れっぽい」「同じ話を繰り返す」「簡単な計算ができない」などの症状のある方に、認知症の診断外来を行っています。早期発見のためにも、「おかしいな?」と思ったら、まずご相談ください。

【〒611-0011 宇治市五ヶ庄広岡谷2番地 ご相談は 0774-32-5960 (認知症疾患医療センター専用相談電話) まで】



認知症の人と ともに生きる社会

(福)京都福祉サービス協会 高野事務所所長

藤本 敏朗

京都福祉サービス協会 高野事務所は、京都市左京区を対象エリアとして、日常生活に何らかの支援が必要な高齢者・障害者の方々へ、ホームヘルパーのサービス提供を行っている事業所です。今ヘルパーは、掃除や調理、排泄の支援をはじめ、終末期のケア、喀痰・吸引の医療的ケア、精神に障害を抱えた方の退院後における日常生活の再スタート支援(共同実践として、買い物、掃除、調理等を一緒にを行います)等々、家事や身体的な介護はもちろん、「孤独感」や「不安感」を心理的にサポートしていく役割も担っています。また現在、様々なところでクローズアップされている認知症のケアにも数多く関わっています。

90歳で独居のAさんは、認知症としては中程度の症状を抱え、自分一人では、食事や更衣、入浴などを行うことが難しくなっており、「私、どうしたらいい？」が口癖です。そのため、週2回のデイサービスと毎日のヘルパーを利用され、在宅生活を維持されています。他に金銭管理は、成年後見制度を利用されています。私達がAさんと関わる上で最も大切にしていることは、Aさんを患者さんとしてではなく、ひとりの生活者として理解し、Aさんの「今」を支えていくことです。今、生活の中で関心があるもの、多くは失われた記憶の奥底で展開されている人生の物語、時折もたげてくる不穏な感情にも寄り添いながら、Aさんとコミュニケーションを深めていきます。記憶は失われても感性はしっかりとAさんの個性として残っており、そこを接点にして、今の生活を楽しんでいただけるように働きかけをしていきます。ヘルパーの名前と顔を覚えることは出来ないAさんですが、「息子は遠くに住んでいるけど、毎日誰かが来てくれたら、私はここに居ることができる」といつもヘルパーに感謝の言葉を伝えてくれます。

この事例のように、認知症になれば、在宅生活の

継続がすべて困難になるということでは決してありません。ただ、ケアを受ける機会に恵まれず、周辺症状が急激に進行した場合は、やむを得ず認知症専門病院等への入院という形を取らざるを得ない場合もあります。発熱や痛みがあれば、すぐに近所の医院で診察を受けることが出来るように、認知症になっても、地域の中で数多く点在する医院で、いつでも気軽に相談が出来て、適切なアドバイスを得ることができれば、どんなにかご本人や家族が救われることでしょう。欲を言えば「認知症24時間救急対応」のようなことが出来る医療機関が各行政区に一箇所でもあればと強く思います。

現在、国は急増する認知症への対応施策として「オレンジプラン」を提案しています。キーワードは「地域での生活を支える」です。ただ、効率、競争第一主義の現代にあつては、「地域」そのものが疲弊しています。私達は、今後も認知症に関わっている多職種の方々との更なる連携を通して、認知症の人とともに生きることの出来る安心、安全な地域社会を築いていけたらと思います。



私たち高野事務所は、地域における最大の事業所として、スケールメリットから生まれた多彩・多様な経験と実績を糧に、規模よりも最高のサービス、高いスピリット(精神)で地域に求められる介護サービス事業所を目指しています。

【〒606-8103 京都市左京区高野西開町5番地 京都市左京合同福祉センター3階】



鈴木 祐三子

父と過ごした 大変だったけれど 大切な時間

父の仕事は染の職人。20年前に脳梗塞を発症し、リハビリで文字は書けるように成りましたが、絵は描けなくなりました。其れでも組合の理事長に選ばれ、職人の地位を向上させるために頑張り続け、漸くお役目を返上した約10年程前、再度脳梗塞を発症。それを境に父の症状は急激に悪くなっていき、それから2〜3ヶ月はまるで1年以上にも感じるような、壮絶な日が続きました。

父が暴れると家の中が地震の後のように無茶苦茶になりました。また徘徊もあり、私たちにとっては休まる時間のない毎が続いていました。どうしていいのかわからなくなっていた時、知人の紹介で近藤先生にお会いでき、はじめて父が「認知症である」との診断をいただきました。「ご本人が一番大変なんですよ」と仰って頂きハットしたのをはつきりと覚えています。入院直前には、母を道連れに、走ってくる車に飛び込むとするなどの、自殺願望、妄想、暴力も次第にエスカレートしていました。結局入院ができたのは、私たちの身の危険を感じた友人の叱咤の判断で、警察に通報し、パトカーで連れて行ってもらえたからでした。

いわくから病院では、父の行動を細やかに観察してください、コーヒーが何よりも好きな父に、不安な様子や心が高ぶる時には昼夜を問わずコーヒーを作ってくださいたり、何をすれば、気に入ってもらえるのか、どついついことが、ダメなのかを観察してくださいました。唯、原因がわからず暴れまわったことがありましたが、それは便秘が続き、苦しくなり、死ぬのではないかと恐怖を覚え、苦しいから暴れていたのがその原因であることを突き止めてください、事なきを得ました。

入院から約半年後には、退院について近藤先生の助言をいただき、約1年後に自宅で介護をする決断

を致しました。初めのころは、父に引きずられる様に、母も認知度が落ちて行きましたが、近藤先生に、夫婦にはよくある事と、アドバイスをいただいたまま、案の定、父が落ち着くと、母も落ち着きを取り戻し、二人で介護に関われたからこそ良い時間が過ごせたのだとおもいます。自宅での介護は、母がいなかったら到底無理でした。

最後は自宅での看護になりましたが、近藤先生が往診に来て下さって、父も家族も安心して自宅で過ごせたのだと思っています。介護にのめり込むと、終わりが無いように思う時もありますが、其れもいづれ終わりがきてしまいます。振り返るとあつという間です。

その大切な父と、大切な時間を、精一杯過ごすことができ、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。



元気なころの父はじっとしていられない人でした。遊びも付き合ひも広い人で、数えきれない程の趣味がありました。きっとそれは、父の仕事であるろうけつ染めの図案のネタ探しという一面もあったのでしょうけど、一番はきつとさみしがり屋だったんだと思います。父は音気質の職人だったので、同じこと二度聞いたら怒鳴る、三回聞いたら物が飛ぶというような人でしたので、私は友禅染めとろうけつ染めを父の工房で長く勤めておられた職人さんから習いました。でも、職場も家の中もあんまり変わらなかったですね。(笑)

場あ 11月15日発行 発行人：医療法人 稲門会 いわくら病院 広報委員会

特定非営利活動法人ゆりかもめ 障害者就労継続支援B型事業所

「社会と関わりを持てる場を目指して」



右上：百貨店で販売されているリバーシブルのベスト／
右下：着物地のポーチとミニ畳／左下：生地の色に合わせて
縫製の糸の色を変えています。



特定非営利活動法人「ゆりかもめ」では、現在和菓子を作る化粧箱の箱折作業をメインに、着物地で作った服や小物なども制作しています。
働いておられる方々は精神障害者手帳をお持ちの方で、尚且「ゆりかもめ」で作業をしたいと考えておられる方々です。

私たちは病状の経過や、こういったことに気を付けて下さいとか、こういった特徴がありますなど、その方の個性を医師やソーシャルワーカーさんから教えて頂きます。そして、そういったことに気を付けながら利用者には慣れていくって頂きます。
仕事を始められた方は平均的に言って5、6年くらい働いて頂いています。また、若い方に多いのですが、ここで仕事をされて、就職などを目標に置く次のステップに移行されることも多いです。対して、中高



障害者就労継続支援B型事業所
ゆりかもめスタッフ
浅井 俊次さん

年の方は割と長く居られることが多いと思います。
働いておられる方の中には、地域で一人で生活しておられる方も多いので、この事業所を日中の活動の場として利用されている場合も多いです。これにきて仕事をすることで日々の生活リズムを作ることが出来るようになります。

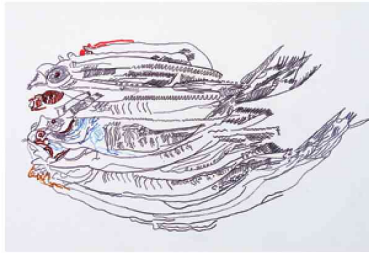
納品させて頂いている先には、長いお付き合いをさせて頂いている企業がありますので、年間途切れることなく仕事があります。和菓子メーカーさんですとこれから観光客が増える紅葉のシーズンから年末に向けて忙しい季節を迎えます。和菓子を詰めるきれいな化粧箱を折って箱に商品を並べると、この店頭に並べられる状態まで仕上げていくこともありますし、もちろん納品の際も運搬車への積み込みや受け渡しなど「通りの工程すべて」に関わって頂いております。

こちらとしては、人それぞれのスピードを保って、長いスパンで仕事を続けて頂けるように、無理はせずにつけて下さいと言をかけてもらっています。
その時々体調に気を使いながら、無理のないペースで仕事をさせて頂き、休まれることなく決まった曜日に出動して頂くことが重要なんです。一日中、同じ姿勢で作業をしていると、肩や腰や首など結構な疲れが溜まるものです。それでも日々、何か社会と関わることに、また時に仲間としゃべりながら仕事をすることで心の健康も保つことが出来るのではないかなと感じています。

編集後記

今回この特集を作成するにあたって、非常に多くの方の御協力を賜り深く感謝しております。と同時にやはり認知症医療は「つながり」が大事な医療であるということを再認識しました。当院スタッフと①認知症を生きている方②御家族様③それを支える医療関係者様及び地域の方・支援していただいている方とのそれぞれの「つながり」、そしてそれはご本人様自身がおたくなりのつながりも、つながりをつけているのだというところに身の引き締まる思いがいたしました。一期一会を大切にこれからも、日々の医療に取り組んで参りたいと存じます。

表紙作品および挿絵紹介



表紙の絵は、作業療法プログラム「絵画」の中で描かれた作品です。
表紙絵の作者は、長く絵画プログラムに参加されている方で、これまでの「場あ」の表紙も手掛けてくださいました。絵を描き始める、真剣な表情で集中して取り組まれ、描かれた作品は人を惹きつけるものが多いです。現在は、サインペンや鉛筆での作品を多く仕上げられています。が、新たな可能性を見出すため、水彩絵の具等の他の画材の利用をお勧めしているところですが、これからもこんな作品が生まれるか、スタッフ一同、楽しみにしています。

いわくら病院 作業療法室

医療法人 稲門会

いわくら病院

日本医療機能評価機構認定病院

〒606-0017 京都市左京区岩倉上蔵町101 ☎ 075-711-2171 FAX 075-722-7898

http://www.toumonkai.net